

【論文】

ウエルネス観光まちづくりにおける  
ウエルネス滞在リゾート活用に関する一考察  
—フフ山梨の事例から—

A study of the town development based on Wellness Tourism  
by utilizing Holistic Resort and Wellness Resort  
—From the perspective of the case of “Fufu Yamanashi”—

森田 浩司\*  
Koji Morita

【要旨】

本稿では、ヘルスツーリズムをベースにした観光まちづくりの現在の日本各地における推進事例を調査した。その結果、現行では、日本各地におけるヘルスツーリズムの取り組みの多くが、「湯治滞在」や、「ウォーキング」の取り組みに留まっており、広範なウエルネスプログラムの提供には至っていない現状が明らかになった。その中で多様なウエルネス需要に対応出来ているのが、統合療法をベースとした各種プログラムを複合的に提供することをコンセプト（目的）としたホリスティックリゾートや、複数のウエルネスプログラムを提供している「ウエルネス滞在リゾート」という主に民間の宿泊施設である。この点について、本稿では「フフ山梨」の事例の切り口からの考察を試みた。その結果、こうした「ウエルネス滞在リゾート」と自治体が、ウエルネス観光まちづくりでタイアップして取り組むことで、幅広いウエルネス需要に対応出来るウエルネス観光まちづくりに繋げていける結論を導き出した。

**Keywords** : ウエルネス、ウエルネスツーリズム、観光まちづくり、  
ホリスティックリゾート、ウエルネス滞在リゾート

## I. はじめに

### 1. 研究の背景

厚生労働省によると、2013年の日本人の平均寿命は男性が80.21歳、女性が86.61歳である一方、アメリカワシントン大学の研究チームの調査によると同じ2013年の日本の健康寿命（健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間）は、男性が71.11歳、女性が75.56歳とのことである（日本経済新聞、2015）。これらからわかることは平均寿命と健康寿命との差が10歳近く開いているという状況である。つまり、多くの人々にとって、人生終盤の残り10年は寝たきりであったり、自らの意思で活動するのに何らかの制約を余儀なくされるなど、必ずしも望ましい状況にない事が示唆される。こうした状況下において、「死ぬ直前まで自分の足で歩いて人生を楽しめるような健康」を望む「健康（寿命）志向」が高まっている。

また、情報化の進展や24時間社会の定着、長引く不景気による業績悪化などによるストレス社会化が進行しており<sup>1</sup>、こうしたストレスからの解放やリフレッシュを求める「癒し志向」が近

---

\*大阪観光大学観光学部 准教授 Associate Professor, Faculty of Tourism, Osaka University of Tourism

<sup>1</sup> 伊藤(2000) は、科学技術の進歩が我々に大きな恩恵をもたらす一方、現代社会が我々に様々な心理的・社会的ストレスを与え、それが人々のメンタルヘルスに悪影響を与えている。また社会の情報化により、世界中の情報昼夜を問わず入ってくる状況になり、こうした状況に対応すべく、企業も次第に24時間体制を取るようになり、こうした環境下に於いては、人々は一定の生活リズムを保つのが困難となり、こうした生活リズムの乱れが人々の精神状態にも悪影響を及ぼすことは避けがたいとしている。

年高まってきている。

こうした現在の「健康志向」「癒し志向」の傾向は、日々の生活の中で、テレビや新聞、雑誌の健康をテーマにした番組、記事や、健康食品や健康グッズのコマーシャルは枚挙にいとまがないことから推察可能である。また観光においても、旅行・観光目的に関する各種調査から「健康志向」「癒し志向」の傾向、とりわけ「癒し志向」の高さが見て取れる（Ⅱ章2に詳述）。

## 2. 問題の所在

しかし、こうした需要が必ずしも観光まちづくりの活性化に繋がってこない困難さに直面している現実がある。特に「健康志向」については、観光展開・商品化の難しさが伴う。例えば、日本ヘルスツーリズム推進機構（2017）のヘルスツーリズムの定義（「健康・未病・病気の方、また老人・成人から子供まですべての人々に対し、科学的根拠に基づく健康増進（EBH: Evidence Based Health）を理念に、旅をきっかけに健康増進・維持・回復・疾病予防に寄与するもの」）のように、ヘルスツーリズムにおいては、提供側のエビデンス志向が強い傾向にある。提供者側としては、お客様に提供する以上は、いい加減なものではなくきちんとした医科学的裏付けが求められる責任があるため、エビデンス志向が強まることはやむを得ない部分もある。しかしながら観光客側にしてみれば、西村（2016）も示すとおり、レジャー色や楽しみを求める観光において、エビデンスベースの堅苦しい、拘束時間が長い、融通が利かない、マニアックな取り組みには、楽しみや気晴らしを求める観光客の忌避感が否めず、提供側の意向と客側のニーズとが乖離しており、この点が、ヘルスツーリズムに基づく観光まちづくりの観光展開や商品づくりを困難にする要因の一つと考えられる。

また、エビデンスベースに偏れば偏るほど、例えば病院などの医療施設や医療機器の使用を伴うケースが増えてくる。しかし、診察室や病床、医療施設の利用スペースや検査機関、医療機器、さらに医者や理学療法士、セラピスト、トレーナーなどの人材には上限があり、結果として1件あたりの受入観光客数にも、比較的lowめの上限を設定せざるを得ない。通常の周遊観光や、同じニューツーリズムのコンテンツツーリズムのように、何台もの観光バスでやって来る観光客を連日受け入れることは困難である。したがってウエルネスツーリズム、ヘルスツーリズムによる観光まちづくりや活性化については、大規模集客による儲けという一攫千金志向より、地域やサービスを気に入って繰り返し訪問してもらうリピーター化志向で以って捉えるべき性質を有している。そのためマスツーリズム的な観光客数増加やそれに伴う大型かつ即効性のある経済効果への期待感を持って、ウエルネスツーリズム、ヘルスツーリズムによる観光まちづくりや活性化を捉えてしまうと、経済的活性化の事前期待にはそぐわない困難さという問題を抱える事となる。

### 3. 研究の目的と方法

本稿では、こうした前項の問題の改善のため、各地に点在して展開しているウエルネス滞在リゾートの活用が一助として機能するかについて、まずは各地のヘルスツーリズムの取組事例で具体的に提供されている内容から現状の問題点を分析する。その上で、ウエルネス滞在リゾートの1つである「フフ山梨」の事例の視点から、課題解決に向けた方策について考察する。

研究方法については、需要動向については既存の観光統計の、ヘルスツーリズムの取組事例については日本ヘルスツーリズム推進機構等が発表する各々の2次データを基に検証する。またウエルネス滞在リゾートについては、本稿ではウエルネス滞在リゾートの1つである「フフ山梨」を取り上げ、関係者へのヒアリング調査および実地滞在による観察を基に検証を行い、結論を導き出していく。

## II. 観光行動におけるウエルネス需要の現状

### 1. ウエルネスとウエルネスツーリズム

Sheledon と Bushell (2009) は 'wellness' という言葉は 1959 年に Halbert Dunn が 'wellbeing' と 'fitness' を統合して作ったのがはじまりとされ、Dunn は 1961 年にウエルネスを「人間として大いに満足した状態」と言及している。そして、GLOBAL WELLNESS INSTITUTE (GWI, 2015) によると、このウエルネスという言葉は 1970 年代に専門用語として使われるようになり、過去 10-15 年の間に急激によく使われるようになった。海外では 2000 年以降のウエルネスツーリズムに係る研究だけでも、ウエルネスの定義に係る先行研究がいくつも見られる<sup>2</sup>。各々微妙に表現や内容は異なるところもあるが、これらの先行研究が定義づける概念において共通しているのは、ウエルネスという概念は「健康の維持・増進を、複合的な観点やそれらとの関連性を踏まえて捉える概念である」ということである。

また日本においては、ウエルネスおよびウエルネスツーリズムの理論研究は少ないが、日本におけるウエルネス研究の第一人者である野崎 (1994) は、「ウエルネス」を「自分の人生には自分で責任を持つことを知り、より幸福でより充実した人生を送るために、自分の現在の生活習慣 (ライフスタイル) を点検し、自分で変えなければならないことに気づき、これを変革し続けていく過程である」と定義している。以上を勘案し、本稿では「ウエルネス」の定義を、「複合的な視点から総合的に、また自ら積極的に、様々な思考や活動を通じて、健康的な生活習慣を整え、健康で充実した人生を達成・維持・増進していくことを示す概念」と定めることとする。

またウエルネスツーリズムに関しても上述の 2000 年以降のウエルネスツーリズムに係る研究だけでも、いくつもの定義が挙げられている。これらの先行研究の定義において共通しているの

---

<sup>2</sup> Smith & Puczkó (2014)、GWI (Global Wellness Institute /2015)、Powis と O'Leary (2009)、Erfurt-Cooper & Cooper (2009)、National Wellness Institute (2014) など

は、端的にいうと、上述の「ウェルネスを体現するツーリズム」という事である。逆に見解が異なる部分としては、ウェルネスツーリズムの概念における主な目的や行為部分に medical (医療・治療) 要素を含めるか否かという部分である。この詳細の検証は稿を改めてとするが、本稿における定義としては、「治療」に係る「メディカルツーリズム」と「治療以外の健康」に係るツーリズムとしての「ウェルネスツーリズム」は、条件や要素、(地域活性化や事業における) 成功の為の方向性も全く異なるものである (GWI、2015) ことから、完全な「治療」目的や行為を第一義とするツーリズムはウェルネスツーリズムに含めないという線引きを行い、「ウェルネスを体現化し、メインとする目的を治療以外に置くツーリズム」を「ウェルネスツーリズム」と定義する。

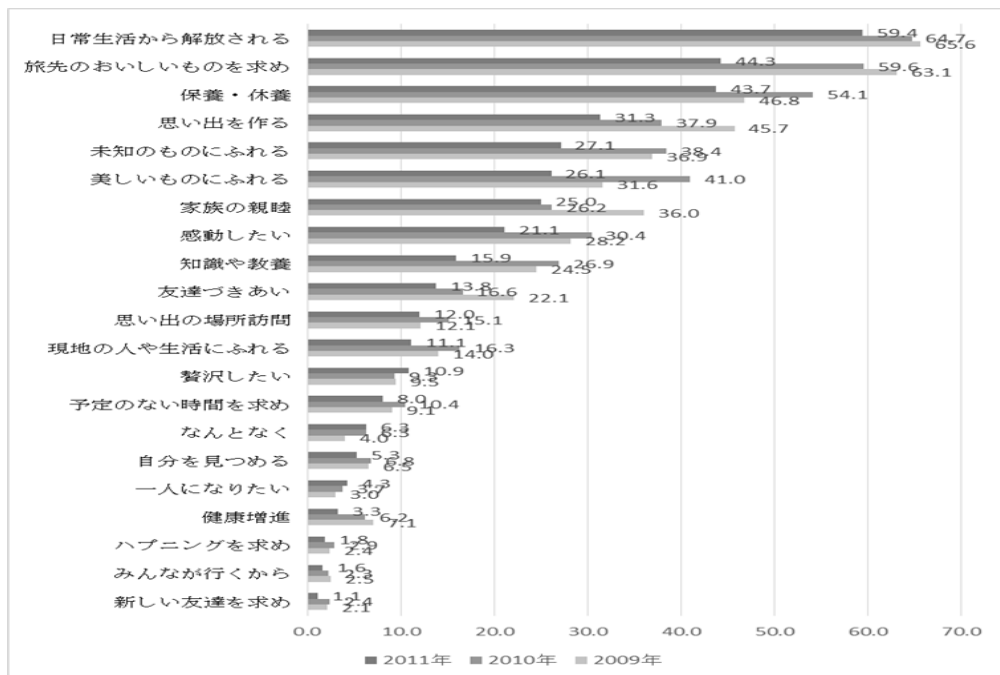
## 2. 観光行動における「健康」「癒し」の需要

I 章の 1 (研究の背景) で述べたように、現在社会の世間一般において、また観光においても、「健康志向」「癒し志向」は高まりを見せている。本節では、旅行・観光目的に関する各種調査から、観光における「健康志向」「癒し志向」の傾向について考察していく。

日本観光振興協会 (2017) の調査のうち、「宿泊観光客の旅先での行動について (複数回答)」では、30 項目中、1 位「自然の風景を見る 37.4%」、2 位「温泉浴 30.3%」といった心身の癒しに繋がるウェルネス要素が上位で、各々がおおよそ 1/3 を占めている。

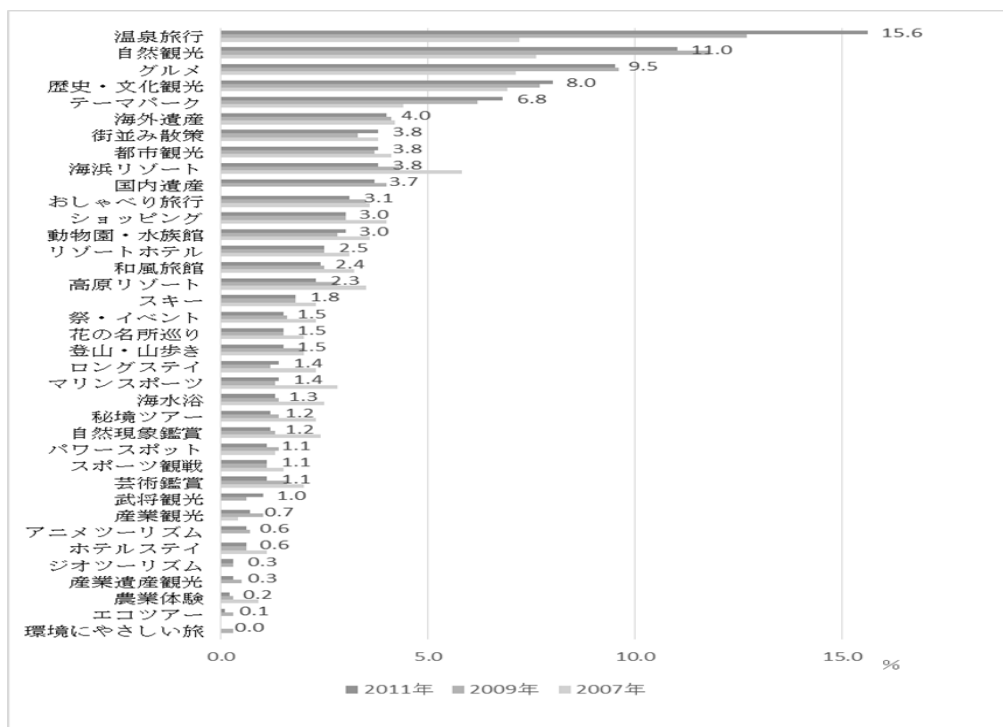
また日本交通公社 (2013) の調査の「旅行に出かけた動機 (複数回答)」の質問 (<図 1>) でも 2009、2010 年、2011 年の調査でいずれも 21 項目中第 1 位が「日常生活から解放されるため」で全体の約 6 割が選択しているほか「保養、休養のため」が 3 位となっていて上位 3 位のうち 2 つが心身の癒しに係る要素となっている。

<図1>旅行に出かけた動機（複数回答）（単位%）



出典：(財)日本交通公社（2013）『旅行者動向 2012』 p.90

<図2>今後行ってみたい旅行タイプ（単位%）



出典：(財)日本交通公社（2013）『旅行者動向 2012』 p.66

さらに「今後行ってみたい旅行タイプ（複数回答）」の調査（〈図2〉）でも2007年、2009年、2011年のいずれも、上位3位に「温泉旅行」「自然観光」が入っているほか、「海浜リゾート」「リゾートホテル」「高原リゾート」など日常の喧騒を離れて過ごす「癒し滞在」が上位にランクインされている。

このように複数のデータから、心身の癒し、ひいては心身の健康に係る観光需要が高いことがデータの裏付けがあると考えられる。

### Ⅲ. ヘルスツーリズム取り組み観光地のウェルネスツーリズム施策の現状と課題

#### 1. ヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例

ヘルスツーリズムとは、端的に言えば「健康に係るツーリズムの総称」である。

I章2で述べたとおり、日本ヘルスツーリズム推進機構（2017）によると、「ヘルスツーリズム」とは、「健康・未病・病気の方、また老人・成人から子供まですべての人々に対し、科学的根拠に基づく健康増進（EBH: Evidence Based Health）を理念に、旅をきっかけに健康増進・維持・回復・疾病予防に寄与するもの」である。

研究者により見解が分かれるが、主流な考え方としては、健康に係るツーリズム「ヘルスツーリズム」が上位概念にあり、その下位概念として、「治療」をメインの目的とする「メディカルツーリズム」と「治療以外の健康に係るツーリズム」をメインとする「ウェルネスツーリズム」がある<sup>3</sup>。

本章では、日本ヘルスツーリズム推進機構がホームページ上で掲載している2次データ（推進地一覧早見表）を基に、一部筆者の現地調査やこれまでの研究過程により確認したものも加えたウェルネスツーリズム施策の推進地や実施主体組織を取り上げた。そこでの取組内容と提供プログラムについては、日本ヘルスツーリズム推進機構の推進地一覧早見表を基に、改めて全施設のホームページを確認して本稿執筆時点の最新情報に修正、かつ一部の地域・自治体および施設については筆者の現地調査を踏まえた修正を施してまとめたものが〈表1〉である。

34事例のうち、自治体は11、その他は宿泊施設などの組織の取り組みである。このうち、本稿では、統合療法をベースとした各種プログラムを複合的に提供することをコンセプト（目的）としたリゾートを「ホリスティックリゾート」と定義し、他の宿泊プランもある中での1プランや1プログラムとしてウェルネスプログラムを展開する宿泊施設とは、区別して表記する。

---

<sup>3</sup> 2000年以降のウェルネスツーリズムの先行研究では、Erfurt-Cooper & Cooper (2009) や Sheledon と Bushell (2009) は、本文で掲げた「ヘルスツーリズムは健康の領域を包括するツーリズムの（上位）概念」とする考えには反対しているが、それ以外は概ねこの見解を取っている。詳細は稿を改めて詳述する。

<表1> ヘルスツーリズムの取り組み観光地および組織とその事例

地域	取り組み内容/組織	取り組み内容
北海道	ルスツリゾート(留萌市)	・ウエルネスプログラム提供 (※メディカルチェック, 食事(健康メニュー), レジャーアクティビティ, 温泉, アロマトリートメント, 健康食品提供) ・自然環境
青森	高温泉旅館(十和田市)	・湯治療法 ・自然環境
秋田	玉川温泉・折玉川温泉(由利市)	・湯治療法 ・健康食 ・温泉治療
山形	上山市	・クアオルトウォーキング ・旅館での健康メニュー ・観光まちづくり(上山温泉クアオルト事業) ・温泉
宮城	虎崎子温泉 旅館大石	・湯治療法
福島	岳温泉観光協会(二本松市)	・トータルウォーキング
	スパリゾートハワイアンズ(いわき市)	・スパリゾート ・観光湯治プログラム
神奈川県	江戸の島アイランドスパ(藤沢市)	・温泉併用型健康増進施設 ・ホリスティックリゾート
新潟	田嶋の森 養生館(阿賀野市)	・温泉 ・食事(地産地消ベース)
	松之山温泉 和泉荘(十日町)	・湯治療法 ・食事(マクロビオティックメニュー)
石川	能登島地獄づくり旅館(七尾市)	・自然環境
山梨	保徳園ホテルフジ山梨(山梨市)	・ホリスティックリゾート
長野	軽山市	・森林セラピーを中心としたウォーキング, トレッキング等各種プログラム, 健康メニューを提供する宿泊施設が複数ある
	いのちの森 水輪(長野市飯岡高塚)	・ホリスティックリゾート
	花高養生館(安曇野市)	・ホリスティックリゾート
	赤野市	・入ヶ岳スーパートレイル(トレッキング・ウォーキング)
	森屋ホテル(上田市)	・湯治療法 ・温泉療法プログラム ・エステ ・食事(地産地消ベース)
岐阜	岐阜カランドホテル(岐阜市)	・食事(常備料理)
静岡	熱海市	・「熱湯養生浴」 ・NPO法人ABC(熱湯(Atoni)×メディカル(Medical)インター(Interact)クラブ(Glob))により, 温泉療法・温泉療法・食事療法の指導や健康および各種イベントの実施。
三重	メナード青山リゾート(伊賀市)	・ビューティ&ヘルシープログラム(エステ・温泉療法・健康食・各種体験プラン) ・温泉 ・自然環境
	タラサ忠孝(鳥羽市)	・温泉療法 ・エステ ・食事療法 ・温泉療法
兵庫	有馬温泉 太陽の湯(神戸市)	・温泉併用プログラム型健康増進施設 ・森林セラピーウォーキング ・エステ ・温泉
和歌山	奥野古道(田辺市)	・健康ウォーキング ・自然環境
	HOLISTIC SPAGE JAPAN WEG[GAL& RESORT(和歌山)	・ホリスティックリゾート ・統合療法医療施設
鳥取	三軒町	・観光湯治(温泉医療連携・温泉・自然環境)
島根	森のホテル「もりのす」(飯石町)	・森林セラピー
美祿	ハルスケア・リゾート サ・ソアラ(ハウステンボス)	・ホリスティックリゾート
熊本	五草市, 五草プリンスホテル	・健康ウォーキング
	TAD Retreat & Cafe(阿蘇市)	・自然環境 ・食事(オーガニックメニュー) ・テラックスプログラム
大分	クアージュゆふいん(由布市)	・ドイツ温泉療養施設
	杵田市	・温泉療養健康システム ・ウォーキング
鹿児島	タラソ美容の館(奄美大島)	・温泉療法 ・地形療法
沖縄	かんたたら(宜野湾市)	(日帰り施設) ・温泉療法 ・温泉療法 ・ウエルネスプログラム
	久米島	・食事(島内宿泊施設でのアレルギー対応食)

\*ホリスティックリゾート:  
統合療法をベースとした各種プログラム(※メディカルチェック, 食事療法, 温泉療法, 温泉療法, 食事療法, アロマトリートメント, 手技療法等)を統合的に提供することをコンセプト(目的)としたリゾート  
(注:各種宿泊プランの一つとして各種ウエルネスプログラムを提供する宿泊プランを有する, または施設内に一部ウエルネスプログラム提供施設がある, ウエルネス療法の提供をしている等の場合はプログラムとして掲載)

出典: 日本ヘルスツーリズム推進機構ホームページ(2017)を基に筆者にて加筆・修正

日本中のあまねく全てのヘルスツーリズムを推進している地域や自治体、組織を網羅しているとは言えないものの、日本においてヘルスツーリズム要素を踏まえた観光まちづくりや宿泊営業を行っていて、それらを標榜している主な代表的な地域・自治体や宿泊施設、組織について、および実施主体と主要な取り組みについては、取り上げられているものとする。

## 2. ヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例の課題

前節で〈表1〉でとりまとめた自治体・地域、および組織の取り組みから、本節では、現状のヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例の課題について検討していく。

まず自治体・地域の取り組みは、全体34の取り組みのうち11自治体に留まっており、自治体や地域全体での取り組みの難しさが示唆される。各地域内で、それぞれの長い歴史の中で、個々の宿泊施設やその他観光施設が、各々で様々なコンセプトで営業をしてきており、こうした状況下で、「ヘルスツーリズム」というコンセプトで一括りにしてベクトルを一にして取り組むには、どうしても困難が伴うものと考えられる。こうした中で、自治体の取り組みの半数以上が温泉地での取り組みとなっていることが、今回、一覧表化することで明らかになった。

日本は明治時代に鎖国が解かれ、西洋から解剖学や疫学を踏まえた様々な対症療法的な療法をベースとした西洋医学が紹介され、それ以来、日本の医学界においては、今日に至るまで、対症療法的な西洋医学が治療・医療の中心となっており、その結果、統合医療である温泉療法は徐々に日本の治療・医療の主流から外れ、各地の温泉病院なども年々閉鎖される状態になっている。また高度経済成長期以降、日本の多くの温泉地では、団体旅行需要を背景に歓楽の場と変遷していき、多くの伝統的な湯治場は集客が減少し、温泉療法をベースとした湯治滞在は、日本の温泉地全般の傾向としては、衰退の一途を辿ってきている。一方、ドイツをはじめとした欧州諸国では、対症療法、統合医療双方が歴史的に併存してきており、歴史的に多くの温泉地は日本の温泉地のような歓楽場としてではなく、温泉療法を踏まえた温泉保養地として今日に至っている。こうした温泉医療や温泉地の歴史的な変遷の違いにより、ドイツなどでは古くから温泉地では温泉療法をベースとした滞在が提供されている中で、日本ではそれが実現できていない状況にある。こうした歴史的背景に伴い、「温泉」という心身の健康効果をもたらす資源を有しながら、日本の温泉地では、それらを活用した滞在スタイルはまたそれほど多く提供されていない。「温泉」という心身の健康効果をもたらす資源を有している「温泉地」の場合、特に三朝温泉のラドン泉など、医科学的なエビデンスが整いつつある泉質の温泉を有する場合は、そこが差別化やオリジナリティ、アイデンティティに繋がるため、ヘルスツーリズム的な取り組みが行いやすいものと考えられる。また自治体・組織を問わず、全体的に自然環境を活かした湯治滞在の占める割合が多い。したがって「温泉地」が健康や癒しをキーワードにウェルネス観光まちづくりに取り組むことは、活性化の1つの切り口として有用であることが考えられる。



しかしながら、それ以外の取り組みについては、ウォーキング、地産地消の自然食ベースの健康食の食事提供の域でとどまっている事例が多い。上山市のかみのやま温泉を中心に、熊野古道や由布院などで取り組まれているクアオルトの取り組みがあるが、本場ドイツの取り組みと違い、発展途上にある現段階においては、活動の中心がウォーキングの取り組みに留まっている現状にある。このように自治体・地域においては、総合的なウェルネスプログラムの提供に至っていない状況が表1からも読み取れる。言い換えると、ヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例の現状を鑑みると、多様なウェルネス需要への適応状況において、ウォーキングプログラムや食事提供という部分的なウェルネス需要への適応に留まっているということが確認できる。

一方で個別の施設においては、数としては多くないが、ホリスティックリゾート（つまり、統合療法をベースとした各種プログラム（メディカルチェック、食事療法、運動療法、温泉療法、食事療法、アロマトリートメント、手技療法等）を複合的に提供することをコンセプト（目的）としたリゾート）をはじめ、いくつかのウェルネスプログラムを提供する施設も出てきている。このような現状を勘案すると、こうした施設をベースにすることで、自治体・地域においても、総合的なウェルネスプログラムの提供が可能なウェルネス観光まちづくりの一助になるものと考えられる。

#### IV. ウェルネス滞在リゾートとウェルネス観光まちづくりへの活用

##### 1. ウェルネス滞在リゾート

「ウェルネス滞在リゾート」という言葉は、観光学研究において、あるいは一般の観光産業界においても確立ないし定義化されている用語ではない。そこで本稿においては、Ⅲ章2節（ヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例の課題）で取り上げた、統合療法をベースとした各種プログラム（メディカルチェック、食事療法、運動療法、温泉療法、食事療法、アロマトリートメント、手技療法等）を複合的に提供することをコンセプト（目的）とした「ホリスティックリゾート」をはじめ、各宿泊施設が提供しているサービスの一環として、ホリスティックリゾートが提供しているようなウェルネスプログラムのうちの複数のプログラムを提供している宿泊施設を総称して「ウェルネス滞在リゾート」と定義することとする。

##### 2. ウェルネス滞在リゾート事例ー山梨市牧丘町 保健農園フフ山梨ー

本節では、「ウェルネス滞在リゾート」のうち筆者が実地調査として訪問・滞在し施設で行ったヒアリング調査および滞在中の観察を基に、ウェルネス滞在リゾートの事例をとりあげる。

上述（Ⅲ章1および前節）のとおり、本稿では、統合療法をベースとした各種プログラム（メディカルチェック、食事療法、運動療法、温泉療法、食事療法、アロマトリートメント、手技療

法等)を複合的に提供することをコンセプト(目的)とした宿泊施設を「ホリスティックリゾート」と定義している。ホリスティックリゾートは、まだ数は多くないが、本節では、その一例として、山梨市牧丘町の「保健農園フフ山梨」を題材に、紙面の都合上、主にホリスティックリゾートなるものの概要について重点を置き取り上げる。なお、文章の内容は、フフ山梨ホームページおよび2017年9月5日から9月8日に行った株式会社グリーンドック春日未歩子取締役およびフフ山梨チーフマネージャー近藤司氏へのヒアリング調査および現地での観察によるものである。

「保健農園フフ山梨」は、関東地区および九州地区に拠点を置き、精神科医療および高齢者医療・介護の分野を中心に事業を展開している翠会ヘルスケアグループのグループ会社である株式会社グリーンドックが運営・管理を担っている。5年前に山梨県から今ある施設を借り受けてホリスティックリゾート展開を始めた。フフ山梨では、心身の健康を保つために必要なアプローチに基づきプログラムや施設をコーディネートされているリゾートで、通常のリゾートホテルと違い、様々なプログラムが提供されており、滞在者はそれらを必要に応じて活用し、心身のリラックス、リフレッシュをはかり、心身の健康を取り戻すことができる。メインターゲットを働く女性に絞り展開を始めたが、雑誌等メディアに取り上げられるにつれて来客数も増加し、今ではターゲット層以外にも賛同する顧客が訪れるようになった。リピーター率は10~15%であるが増加傾向にある。宿泊費が1人1泊2万円台と高めのため、年間のリピート回数は2回程度と多くはないが、年末年始はほぼリピーターで埋まってしまうなど、コアなリピーター層が多い。週末は他の宿泊施設に漏れず家族連れ比率が高まるが、平日には都心のヨガスタジオやクリエイティブ関連企業の研修にも利用され始めている。

この特徴は、まずは緑に囲まれた自然豊かな環境とそこに広がる広々とした施設空間にある。周辺が山梨市の森林セラピーロードに認定されている自然環境の中で、自然に触れながら穏やかに滞在できる。かつ旧来の湯治場にある様な雑多な生活空間や気を遣う共同生活、解放感が無く却って心身が閉じ籠ってしまいそうな狭い居住空間とは無縁で、落ち着いた環境と生活空間および、広々とした居住空間で自分を取り戻す心地よい滞在が可能である。特に日々の業務で忙殺され自分を失いかけた人々が、都会の喧騒を離れリセットするには最適な環境である。

2つ目の特徴として、かつ最大の特徴は、朝昼夜と毎日日替わりで定期的に行われる心身を整えるプログラムの提供にある。午前には坐禅やマインドフルネスヨガなど、昼は農作業や食事作り、夜は医学的なエビデンスに基づく筋膜リリース法や操体法のプログラムがそれぞれの専門家によって提供される。プログラムは本人の希望で必要なプログラムの選択が可能である。定例プログラム以外の時間は、自然環境の中で気ままに過ごすもよし、さらに森林セラピーや各種トリートメント、自律神経バランス測定や個別カウンセリングなど、個々の状態や必要に応じてオプションプログラムを選択して過ごすこともできる。滞在者それぞれが、自分に向き合いながら、自

分のペースで心身の健康を取り戻していける「ウエルネス滞在リゾート」である。

### 3. 「フフ山梨」の事例から考察したウエルネス滞在リゾートのウエルネス観光まちづくりへの活用に関する方策

#### ①幅広いウエルネスの概念に対応できるプログラム提供

Ⅱ章1において、「ウエルネスを体現化し、メインとする目的を治療以外に置くツーリズム」を「ウエルネスツーリズム」と定義した。しかし、「メインとする目的を治療以外に置くツーリズム」というのは実に多岐に及ぶ。つまり「ウエルネスツーリズムとは内包される旅行時の行動が極めて多様で広範なツーリズム」なのである。先行研究でもこの点は指摘されており、その一例として、例えばGWI(2015)は、ウエルネスツーリズムにかかる学術的な論文や産業ベースの文献を見渡すと、定義が専らSPAに特化したものから、数え切れないニッチなツーリズム(芸術に係るものや、ヒーリング・ヨガなどのリトリート体験、スポーツやフィットネス、エコツーリズム、アグリツーリズム、フードツーリズムなど)まで広範囲に跨っていることが明らかになると述べている。

ところが、Ⅲ章で挙げたとおり、既存の日本でのヘルスツーリズムの取り組みにおいては、ウォーキングプログラムや食事提供という部分的なウエルネス需要への適応に留まっている現状が多数見受けられ、この多様なウエルネスツーリズム需要の受け皿としては十分に機能しきれない現状が浮き彫りになっている。そのような状況下においても、ウエルネス滞在リゾート、中でも特にホリスティックリゾートにおいては、そのコンセプトの体現化を目指し、個々の施設の創意工夫や努力により、統合療法をベースとした様々なプログラムを提供し、多様なウエルネスツーリズム需要の受け皿として機能しリピーター化が進んでいる。このような現状を勘案すると、こうした施設を核施設として活用し、ここをベースに展開を進めることによって、自治体・地域においても、総合的なウエルネスプログラムの提供が可能になると考えられる。

#### ②自治体と民間企業とのタイアップによるウエルネスツーリズムディステーションとしてのブランド確立とハード・ソフト両面の協業

自治体の場合、ウエルネスツーリズムディステーションとしての観光政策やまちづくり政策への反映、特区対応などの規制緩和などへの対応、土地・建物の権利関係など、フレームワークづくりやハード面への優位性が高い。一方で、公共の福祉や全住民への偏りないwelfareの分配、職員の定期的な人事異動などもあり、特定分野への傾注や持続的な企画運営といったソフト面の持続的な展開には不向きな部分がある。

したがって<表1>でも浮き彫りになっているが、自治体の取組内容の多くが、ウォーキングや自然環境整備の域に留まっており、より突っ込んだウエルネスプログラムの提供には至ってい

ないことが多い。専門性の高さ、フットワークの軽さ、プログラムの自由度、人材確保の柔軟な対応といったウェルネスプログラムの持続的提供に欠かせないソフト面については、どうしても民間企業に分がある。したがって、事例検証からも想起されるように、ウェルネス観光まちづくりの成否は、自治体と民間企業のタイアップにより、例えばハード面とソフト面、ウェルネスツーリズムディステーションとしての制度立ち上げや仕組みづくりと持続的かつ柔軟な企画・運営展開、という双方の得意分野を活かしつつ不得意分野を補完しあう協業が有効であることがわかった。

事例に挙げたフフ山梨の場合、ハード面は山梨市の所有物であり、管理・企画運営を民間の株式会社グリーンドックに委託する形態となっている。これが、結果として、専門性の高さ、フットワークの軽さ、プログラムの自由度、人材確保の柔軟な対応という民間企業としての利点に傾注できる状況をもたらし、民間企業の利点を活かした企画・運営を可能とし、ターゲット顧客層の満足度を高め、リピーター化や、次回滞在の長期滞在化をもたらしており、この点を裏付ける結果となっている。

## V. おわりに

### 1. まとめ

本稿では、ヘルスツーリズムのうち、「治療」をメインとするツーリズムの「メディカルツーリズム」を除く、「健康志向」や「癒し志向」に基づく「ウェルネスツーリズム」をベースにした観光まちづくりの現在の日本各地における推進事例を取り上げ精査した。それにより、現行では、日本各地におけるヘルスツーリズムの取り組みのかなりの割合が、温泉地の「湯治滞在」や、「ウォーキング」を中心とした取り組みに留まっており、広範なウェルネスプログラムの提供には至っていない現状が明らかになった。

ウェルネスツーリズムはその領域が非常に多岐に渡る概念であり、「湯治滞在」や「ウォーキング」プログラムの提供だけでは、多様なウェルネスツーリズム需要の一領域にしか応えられておらず、より多様な需要に対応していく事が、今後のウェルネス観光まちづくりの鍵であることが判明した。

こうした多様なウェルネス需要に対応出来ているのが、統合療法をベースとした各種プログラムを複合的に提供することをコンセプト（目的）としたホリスティックリゾートや、数ある販売施策の一環としてウェルネスプログラムのうちの複数のプログラムを提供している「ウェルネス滞在リゾート」という主に民間の宿泊施設である。

こうした民間企業と自治体が、ウェルネス観光まちづくりでタイアップして取り組むことで、幅広いウェルネス需要に対応出来るウェルネス観光まちづくりに繋げていける、という結論を導

き出した。

## 2. 今後の課題

### ①人材確保など持続的展開への課題

各種ウェルネスプログラムの中には、ヨガやアロマセラピーなど、世間的な知名度が高く、愛好者数が多いプログラムもある。こうしたプログラムの場合は、需要が高いため、その分インストラクターやセラピストを志す人達も多く、地方都市であっても、ある程度、講師数は確保できる可能性は高く、欠員の補充も問題ないかもしれない。しかしながら東洋医学系のプログラムをはじめとしたマイナーなプログラムの場合、多様なウェルネス需要に対応可能で、一時的に人気が出るかも知れないが、ひとたび講師が欠員すると、後任の講師が見つからず、持続的な展開には繋がらない。特に、自然環境に恵まれた田舎の場所であればあるほど、居住人口が都会のように多くない事から、人材の確保が困難になる。

事例に挙げたフフ山梨の場合、この点についてヒアリングで確認した際、幸い近隣に甲府市という地方都市があり、様々なウェルネスプログラムに取り組む意欲的で比較的若い指導者が多く居るので、多様なプログラム展開も可能で非常に助かっているとの事であった。しかしながら、この例は極めて恵まれた事例であり、実際のところ、多くは人材の確保が極めてネックとなる。2013年9月の東北の田園風景の中に佇む東鳴子温泉の旅館大沼の宿主大沼伸治氏へのヒアリングで同様の質問をした際には、宿単体で様々なプログラムを提供しようと試みても、仮に宿泊施設のスタッフを指導者として養成したとしても、本業が忙しく定期的なウェルネスプログラムの講師に充てることは難しく、さりとて周辺に大きな都市もなく居住人口が少ないため、講師を見つける事すら困難で、持続的で多様なプログラム展開は、宿単体の努力では限界があるとの事であった。自然環境に恵まれたウェルネス滞在に相応しいエリアであればあるほど、多彩なプログラム展開における人材確保の困難さというジレンマに直結するのである。

解決策としては、自治体を中心となって地域住民に行う健康まちづくりの一環で、気功や座禅、太極拳、あるいは温泉地であれば湯中運動など、少子高齢化が進む地域の高齢者の住民にも取り組みやすく、愛好家も多い健康まちづくりプログラムを持続的に実施し、その中で講師に耐える人材づくりを行うことが挙げられる。あるいは自治体や提供宿泊施設が、都会のヨガやアロマセラピーなどの講師養成校を自前でつくるあるいは養成校と提携して人材派遣システムを確立するなどの手段が考えられる。しかしながら予算や人材、その他諸要因が絡み、実施が容易ではなく、多様なウェルネスプログラムの持続的展開への基盤づくりが今後の当面の課題である。

### ②健康まちづくりと観光まちづくりの融合という理想的展開の実現困難さの課題

前項で挙げたとおり、多くの地方エリアにおいて、少子高齢化が課題となっていて、医療費抑

制や地域交流の促進の観点から健康まちづくりを実施する自治体は多い。そうした健康まちづくりのプログラムを、観光客にも開放するなどし、ウェルネス観光まちづくりと健康まちづくりを融合して展開出来れば非常に理想的である。健康まちづくりに取り組む地域としてのブランドが確立すれば、定住人口増加に繋がる可能性があると同時に、その地域の住民が健康である、あるいは健康に意欲的に取り組んでいることが、その地域がウェルネス観光まちづくりを行う際に、観光客に対して非常に大きな説得力をもつ。したがって、健康まちづくりと観光まちづくりの融合が、ウェルネス観光まちづくりの理想的展開との仮説をたて、そうした研究にも着手しはじめた。しかしながら現実の壁は高く、管見のところそれが成功し機能している観光地事例を見出せていない。例えば、鳥取県の関金温泉が、2011年以來健康まちづくりとして取り組んだ湯中運動が地域に根付き、この湯中運動を観光客にも開放、拡大展開したプラチナプロジェクト健康マイレージの取り組みを実施した。健康まちづくりと観光まちづくりの融合の仮説を裏付ける取り組みであり大いに期待した。しかしながら関金温泉旅館組合事務局長の芦田倍芳氏<sup>4</sup>によると、いわゆるマイレージシステムを援用した取り組みであったが、利用は地域住民に偏り、観光客には展開手法に問題があり根付かずに終わったことが判明した。

このように、ウェルネス観光まちづくりを少子高齢化に直面する地域の健康まちづくりに結び付け、相互展開が図ることが出来れば理想的ではあるが、様々な困難さは否めず、こうした困難を克服し、ウェルネス観光&健康まちづくり展開に繋げていくための解決策を見出していくことが、今後の中長期的な将来的課題である。

#### 【参考文献】

伊藤洋（2000）「現代社会におけるメンタルヘルス（精神保健）」財団法人航空医学研究センター『乗員の健康管理サーキュラー』23、1-17頁。

西村典芳（2016）『ヘルスツーリズムによる地方創生\_\_健康長寿を目指して「お散歩でこの国を元気にする」』カナリアコミュニケーションズ。

日本観光振興協会（2017）『平成28年度版観光の実態と志向』（公社）日本観光振興協会。

日本経済新聞社（2015）「2015年8月28日電子版『健康寿命』日本トップ 男性71.1歳、女性75.5歳」[http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG28H2A\\_Y5A820C1000000/](http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG28H2A_Y5A820C1000000/), 2016年8月30日閲覧。

日本交通公社（2013）『旅行者動向2012』（公財）日本交通公社。

日本ヘルスツーリズム推進機構（2017）「ヘルスツーリズムとは」

---

<sup>4</sup> 2017年7月29日 健康と温泉フォーラム 第72回月例研究会にて確認

<http://www.npo-healthtourism.or.jp/about/> (2017年10月28日閲覧)。

野崎康明 (1994) 『ウェルネスの理論と実践』 メイツ出版。

保健農園フフ山梨ホームページ (2017) <http://fufuyamanashi.jp/> (2017年10月28日閲覧)。

Erfurt-Cooper, P and Cooper, M (2009), *Health and Wellness Tourism: Spas and Hot springs*, Bristol, Channel view publications.

GLOBAL WELLNESS INSTITUTE (GWI) (2015), “Executive summary: what is wellness”, *The Global Wellness Tourism Economy 2013 & 2014*, Miami, GLOBAL WELLNESS INSTITUTE National Wellness Institute: About Wellness, <http://www.nationalwellness.org/?page=AboutWellness>, (2015. 9.19).

Powis, B and O’Leary, Z (2009), “Wellness tourism and health promotion.” In Bushell, R and Sheldon, J. Pauline (Eds.), *Wellness and Tourism: Mind, body, spirit, place*, New York, Cognizant Communication Corporation.

Sheldon, J. Pauline and Bushell, Robyn (2009), “Introduction to wellness and tourism.” In Bushell, Robyn and Sheldon, J. Pauline (Eds.), *Wellness and Tourism: Mind, body, spirit, place*, New York, Cognizant Communication Corporation, p6.

Smith, Melanie and Puczko, L (2014), *Health, Tourism and Hospitality: Spas, wellness and medical travel* (2nd edn), New York, Routledge.

#### **【Abstract】**

In this study, firstly, it is looked at the case of the town development based on Wellness Tourism in Japan. As it turned out that, today in Japan, many kinds of the cases of Health tourism on the town development are just the hot spring cure or the effort of walking program. Today, the case of the town development based on Wellness Tourism in Japan cannot meet the wide-ranging needs of Wellness Tourism customers. On this study, it could be found out that we can meet the wide-ranging needs of Wellness Tourism customers by utilizing Holistic Resort and Wellness Resort on the town development based on Wellness Tourism in Japan.